

# 教員養成課程の学生における 授業のデザイン原則の理解のつまずき

河崎美保 (静岡大学)

キーワード：GPK, 教員養成, 個人的信念

## 問題と目的

教師の専門的な知識の一つである一般的な教育方法に関する知識である GPK (general pedagogical knowledge, Shulman, 1987) は授業における学習者の認知的活性化 (cognitive activation) といった実践の質に影響するなど重要な役割をもつ (たとえば, Voss et al., 2011)。そこで本研究は, 教員養成課程の学生に対して GPK を教授する上で効果的な授業設計を検討する。

GPK として特に, 効果的な学習環境を設計する際の4つの原則 (ブランスフォードら, 2002) を教授する科目を対象とする。同様の実践を行った河崎 (2020) では「学習者中心」, 「知識中心」の原則についてねらいとする理解に至った学生が比較的少なかったことから, この原則に焦点を当てて改善を図った授業を実践・評価すると共に, GPK の形成のされ方を検討することとした。

## 方法

### 対象

教員養成系学部 2~3 年次の学生 22 名。

### 実践の概要

半期の講義科目 (選択) において, 学習環境のデザイン原則である「学習者中心」「知識中心」「評価中心」「共同体中心」の理解を促進する授業を行った。GPK は学習時間を確保するための知識と, 確保できた時間の中で学習の質を高めるための知識とに大きく分けられるが (Voss et al., 2011), 本講義の内容は後者に属するといえる。

本研究では各原則について次のような内容に焦点をあてた。「学習者中心」: 学習者の持ち込む既存知識や経験を考慮する。「知識中心」: 思考における知識の重要性。体制化された知識が理解である。「評価中心」: a. 手法は暗黙のうちに特定の認知モデルを前提としており適切な手法であるかも含めて評価する必要がある。b. 学習者が何を学んだかを知り授業改善にいかすことが重要である。

「共同体中心」: 教室, 学校, 学校, 家庭, 地域, 文化といった様々なレベルの共同体に所属しており価値観や規範が異なる可能性に配慮する必要がある。

それぞれの原則について基本的には複数の資料を用意し知識構成型ジグソー法を用いて学ぶことを中心とした授業を行った。前年度の実践 (河崎,

2020) と比べると, 受講生が増加し模擬授業にかかる時間数が増えたため, 「評価」, 「共同体」に関する学習内容, 時間数を減らした。

4 つの原則について学期のはじめに現在の考えの記述を求め, 事前調査とした。学期末のレポート内で, 事前の記述を見返して, 現在はどうのように理解しているかを課題の一つとして出し, その記述を事後調査とした。

## 結果と考察

事前, 事後調査において各原則について「方法」に示した内容を記述しているかを分析し, 該当する学生の数を集計し, Figure 1 に示した。

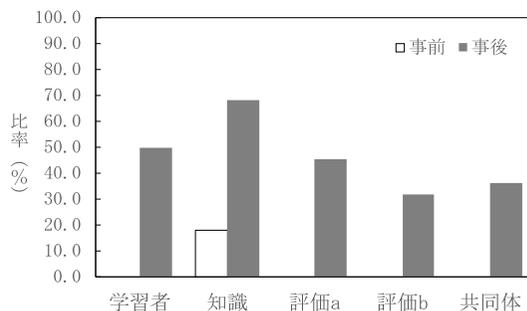


Figure 1 各デザイン原則の理解の変化 (N=22)

「評価」や「共同体」については河崎 (2020) と比べて事後の理解率が低く, 学習内容, 時間数の減少によると考えられる。これに対して, 「知識」や「学習者」は前年度より事後の理解率が比較的高かったが, 両方に理解を示した受講生 (10 名) に対して, どちらも該当しない受講生が 6 名と二分化の傾向がみられた。そこで, この 6 名の記述内容を検討すると, 「学習者」では全員が興味・関心, 疑問, 適した難易度, 主体的といった記述をし, 「知識」では 4 名が知識の量, 正確さ, 前提となる知識, 問題解決のための知識に言及していた。そのために教師は何を知る必要があるのか, またそれはなぜかという問いを介して, 講義で焦点を当てた認知過程の観点から原則の理解を深めることに課題があったと考えられた。個人的信念を講義内容に照らして再考できるようなガイドを強化した授業設計の必要性と, 「伝達」対「構成」で扱われる信念をより細かな肌理で検討する必要性が示唆される。